

ウエニー

ほんの少しの努力とやる気と幸運な出会いで、誰でも猫と友達になれる。そこに生まれるのが本当の友情か、それともはかない愛情かそれはわからないけど、とにかく僕はその猫と友達になった。

彼女の名前はウエニー。

ウエニーが僕の家の上階の物干しにやってくるようになったのは、この春のこと。そうちょうど、ヤマトなでし子さんが僕の働いている会社にやってきて、僕と同じ職場で働くようになったころだ。

なでし子さんはぼくより1年後輩の新入社員だったが、テレビでよくでている松島菜々子に似た美人だったから、社内の男性社員に、圧倒的な人気があった。

世の中あげてIT革命とかで、ある日僕の机にも大きなパソコンがやってきた。

僕は残念ながら、パソコンが苦手で、エクセルや、ワードや、ウインドウズや、マックや、マクドナルドや、ケンタッキーフライドチキンや、ミスタードーナツや、横文字ばかりが頭の中で飛び跳ねて、電気屋で、「マクドナルドのパソコンを見たい」といったら、「ハンバーグやったら、隣に行つて」と言われて、悲しくなったりした。

なでし子さんは美人だから、パソコンに強い。だからますます人気ものになって、いつもなでし子さんの机の前には男性社員の列ができた。

課長なんか、僕がワープロの書類作りに悪戦苦闘していると、わざとその書類をなでし子にまわして

「やっぱり、猫とユースケにはパソコンは無理や」と、言ったりした。

ぼくは、少しぬけたカンジのところ、テレビにでてくるユースケ・サンタマリアに似ていたの、ユースケというあだ名で呼ばれていたのである。

ぼくは家にもパソコンを買った。

富士通のパソコンで、おまけにMOまでつけてもらった。

ある日、ぼくが夜中までかかって会社の仕事でパソコンにむかっていると、ウエニーがやってきた。驚いたことに、ウエニーは猫のくせにパソコンに強い。課長は「猫とユースケは」と言ったが、それは猫には失礼だったのである。

時々、ぼくが会社の仕事で苦闘しているとウエニーがやってきて、仕事をしてくれるようになった。ウエニーは猫だから人間の言葉はカタコトしかしゃべれない。いつも物干しのガラスをコトコトたたいて、僕が戸を開けると、「来た」といって部屋に入ってきた。

それからパソコンをしながら、「このパソコンは頭が悪い。ワープロのほうが賢い」などと、わけのわからないことを叫んだりした。

そのうちに、ぼくは不思議なことに気がついた。それはウエニーが僕の部屋にやってくるのは、きまって課長が僕の担当の仕事を取り上げてなでし子さんに回し、かわりにぼくにはどうでもいい仕事を大量に回したりした日のことだ。

なでし子さんは気の毒そうにぼくのほうを見たが、何もいわなかった。

そんな日に、ぼくが一人でこそこそ家にかえるときまってウエニーがやってきてパソコンをやってくれた。

それから、できあがった書類をみると不思議なことに、ウエニーはなでし子さんと同じとこでミスをするクセがあった。

例えば社長の名前をいつも「ばかねこ」社長と、ワープロでうってしまうことだ。社長の名前は本当は「かねこ」社長なのだ。

その夏は、ぼくはウエニーのおかげで毎晩楽しくすごした。

ぼくとウエニーは夜中の物干しで、見つめ合ったり、歌い合ったり、踊りあったり、なぐさめあったりして遊んだ。

ウエニーは猫のくせに音楽が苦手で、ぼくが「アム口のCD」をかけたりすると泡をふいてぶったおれたりした。

ところがある日、ウエニーは仲間の猫と「キンキキャッツ」のコンサートに行ってきた、といっておみやげをもってきた。「キンキキャッツ」というのは二人組の猫の歌手で、猫町ドームでコンサートをやっているらしい。

ぼくがコンサートはどうだったと聞くと、ウエニーは「みた」と一言いった。

ぼくはウエニーのおかげで、会社でもだんだんパソコンが認められるようになった。ぼくが家でやってきたワープロの書類をみて、課長は驚いて僕の顔をみた。そんな時、ぼくがなにげなくなでし子さんをみると、なでし子さんはぼくのほうに微笑んでくれた。ぼくには何故かうエニーにソックリに見えた。

夏が過ぎて、秋風が吹きはじめたころ、僕はなでし子さんが結婚するという噂をきいた。もうなでし子さんの机には男性社員はならなくなった。

その日はなでし子さんが会社をやめる日で、送別会の後、ぼくが家にかえると窓の外にウエニーがきていた。

それは、その秋一番の寒い日で、ウエニーは紺色のフードのコートを頭からすっぽりかぶって、ガラス戸のむこうの夜の中に立っていた。

大きなフードに隠れてウエニーの顔は見えなかったが、大きな二つの耳だけは隠れようがなくて、粉雪の中で寒そうにふるえていた。

... その日からウエニーはこなくなった。

